

苗場山

上越

小赤沢より

1994年4月3日

メンバー：L. 菅沼博、小森宮秀昭、馬場修爾、白沢光代、手塚紀恵子、加藤康男、岡坂準一、鈴木鉄也、水野正明、今井敏樹、武部慎、久保田修子

自動車利用組と新幹線・タクシー利用組に分かれたが、前日の夕食前までに宿泊する秋山郷小赤沢・秋山館に武部さんを除いて全員が揃った。予定の新幹線に乗り遅れて津南からのバスがなくなり、途方にくれた武部さんを宿のご主人が気の毒に思ったのか迎えに行ってくれた。小赤沢への狭い道は片側が切れ落ちた谷のうえに大小の落石もおちていて、タクシーの中で緊張が解けなかった。

3日 (くもり)

朝6時すぎに宿を出発、秋山館のマイクロバスで車道終点まで送ってもらう。そこからは水野さんを先頭に、12名のパーティで出発する。カエデ沢沿いにすすむが、沢から尾根に上がるところで一苦労する。狭い尾根を尾根沿いに登っていくと、苗場山の急斜面がだんだんに近付いてくる。雪面がしだいに硬くなってきて、斜度はそれほど急ではないようだが、スキーアイゼンを付けていても緊張しながら登る。7合目の雪原で休憩をとり、リーダーと馬場さんはそこに残ることとなり、他の者はそこからの急斜面をつぼ足で登る。膝上までのラッセルは大変なうえに、表面がガチガチでその下はふわふわの雪は踏み固める事ができない。セカンド以下もトップと同じ苦労をさせられ、もがけばもがくほど脱出しに

くくなり、必死になって登る。稜線に出ると物凄い風で、妙高や黒姫山など周辺の山々が望めたがあまりの風の強さに、山頂で休みをとることなく、すぐに戻る準備をする。シールをはずす者、付けたままの者それぞれに広い頂上台地を烈風の向かい風のなかを降り口に向かってすすむが、滑り降りるには木々が邪魔になりなかなか良い斜面が見つからない。台地の端まで行くとかなり広々したバーンが見つかるが、アイスバーンの急斜面だ。転倒したら200mほどの滑落は間違いないので皆が横滑りと斜滑降で慎重に滑り降りるなかで、水野さんは強気の滑りで降りてきた。急斜面を過ぎてから、右手にトラバースするとリーダーと馬場さんに合流した。2人はブロックを積みツェルトを被って風を防いで休んでいた。ここで大休止をした後出発する。大勢なのでぶつからないように注意しながら、晴れてきたせいですっかり湿って重くなった雪に苦労しながら、汗だくになって小赤沢まで滑り降りる。宿で着替えをし、自動車組が出発した後で津南へのバスに乗って帰途に向かう。

タイム：小赤沢6：30－1780
m地点10：00－山頂12：10－
小赤沢15：00

(久保田 記)



